



創造と破壊の舞踏神・シヴァ

ブラフマー神……………ヒンドゥー教の最高神の一人
 ガンガー女神……………ガンジス川の女神、ヒマラヤの娘
 サガラ王……………インドの王
 アサマンジャス……………サガラ王の息子
 アンシュマツト……………アサマンジャスの息子
 パギーラタ……………アンシュマツトの孫
 カピラ仙人……………ブラフマー神の孫

マハーデーイーヴァ（偉大な神）、パシユパテ
 イ（家畜の王）、シャンカラ（恩恵を与える者）、
 ハラ（万物を破壊する者）、バイラヴァ（恐ろ
 しい殺戮者）、ナタラージャ（舞踏の王）、ニ
 ーラカンタ（青頸）、マハーカーラ（大黒天）
 ……すべて、シヴァ神をあらわす名前です。

シヴァ神は青白い裸体に牛糞の灰をぬり込
 み、虎の毛皮を腰に巻いた苦行者の姿で描かれ

ます。長い髪の毛を頭上に結び上げて首に蛇を
 巻き、頭に弦月の冠、手には三叉戟と小さな太
 鼓、額にある「第三の目」が特徴です。

ヒンドゥー教における最高神の一人で、世界
 の終わりにすべてを破壊し、新しい世界を創造
 する役目を持っています。宇宙の破壊・創造に
 かかる凄まじいエネルギーはシヴァ神の舞踏か
 ら生まれると考えられ、踊りの神としても信仰
 を集めています。髪をなびかせ、片足を上げて
 踊るシヴァ神の像は有名です。

暴風を司る神でもあり、人々の生活や命をお
 びやかす一方で、豊かな恵みをもたらす神でも
 あります。

シヴァ神にまつわる神話は数多く残されてい



ますが、その中から「頭でガンジス川を受け止めた話」を紹介します。

その昔、跡継ぎのいないことに悩んでいたサガラ王は、シヴァ神から「六万人の息子と一人の息子を授かる」という予言を受けました。同時に「その子たちは全滅し、一人の息子によって王家は続く」とも予言されていました。

やがて予言の通りに、サガラ王は六万人の息子とアサマンジャスという息子を得ました。ところが彼らは恐ろしく乱暴な性格で、地上にあるもの、天上にあるもの、すべての生き物を苦しめました。怒った被害者たちがブラフマー神に訴えると、ブラフマー神は集まった者たちの顔を見ながら「サガラの子息たちは、自分たちの罪のために命を落とすだろう」と伝えました。さて一方、サガラ王は神々に捧げる祭りのために特別な馬を用意し、息子たちに馬の世話を

命じました。一年間自由に馬は歩き続け、かつてアガスティア仙人が水を飲み干して空っぽにしまった海まで来たところで、馬を見失ってしまいました。

息子たちは必死で馬を探しましたが、どうしても見つかることができません。手ぶらで戻ってきた息子たちから報告を聞いたサガラ王は激怒し、馬を見つけ出すまでは帰ってくるなと彼らを追い出してしまいました。

父からの命令に従い、世界中を探し回った息子たちは、大地に開いた大きな亀裂を発見します。きつとこの奥に馬がいるに違いないと考えた息子たちは、亀裂を掘り広げながら降りていき、ついに地底界にたどり着きました。そこには彼らの探していた馬と、ブラフマー神の孫である偉大なカピラ仙人がいました。

息子たちは馬を取り返そうと突進し、カピラ

仙人を「馬泥棒」と罵りました。これに怒ったカピラ仙人は目から光線を発し、息子たちをすべて焼き殺してしまったのです。

この一部始終を見ていた苦行者ナーラダ仙人はすぐに都へ向かうと、すべてをサガラ王に報告しました。知らせを聞いたサガラ王は大変に悲しみ、孫のアンシュマットを呼んでこう言いました。

「私の勇敢な息子たちが、みな命を落としてしまった。アサマンジャス（アンシュマットの父。サガラ王の一人の息子。彼も乱暴者で王宮から追放されていました）も、祭りのための特別な馬までもいなくなってしまった。どうか苦しんでいる私を助けてくれ」

祖父の願いを聞いたアンシュマットは、すぐさま地底界へと向かい、怒れるカピラ仙人の前で叔父たちの無礼を謝罪しました。そして馬を

返し、叔父たちの魂を清めるための水を与えて欲しいと頼みました。彼の心からの謝罪を受け入れた仙人は「お前の孫がガンガー（ガンジス）を地上へ降ろし、サガラの子息たちを清めてくれる」と伝えました。

無事に祭りをおこなったサガラ王は、後にアンシュマットへ王位を譲り、アンシュマットは息子のディリーパに、そしてその息子のパギーラタへと受け継がれていきました。

パギーラタは祖先たちの死を知ると大臣たちに国を任せ、すぐさまヒマラヤ山へ行き、ガンガー女神のために苦行をはじめました。このようにして神々の世界で千年の時間が過ぎた頃、ようやくガンガー女神が姿をあらわします。

何でも願いを叶えてやるというガンガー女神に向かって、パギーラタは「私の祖先の魂が天界へ行けるように清めてほしい」と願いました。

女神は「わかりました。ですが私が地上に降りたら、その衝撃によって大きな被害が出るでしょう。それを支えられるのはシヴァ神しかいません。苦行によってシヴァ神を満足させ、私を支えてくれるように頼みなさい」と告げました。

パギーラタはすぐにカイラーサ山へ行き、シヴァ神を満足させるために激しい苦行をおこないました。パギーラタの苦行を受け入れたシヴァ神は、ヒマラヤ山までやってくると「さあ、ヒマラヤの娘であるガンガー女神に祈るのだ。私が彼女を受け止めよう」と言いました。

パギーラタが天へ祈ると、ガンガー女神は勢いよく天から飛び降ります。女神が落ちてくると、シヴァ神は彼女を自分の頭で受け止めました。ガンガーの流れはシヴァ神の額にかかり、それはまるで真珠の飾り紐のようでした。この様子を多くの神々や神獣、仙人、アスラ、アプ

サラス（天女・水の精霊）などが見物したそうです。

このようにしてガンガーの水は空になった。海を満たして「ガンジス川」となり、サガラ王の息子たちを清めて天界へと送り出しました。今でもシヴァ神の頭上からは清らかなガンジスの流れが溢れ出ています。

聖なる牛ナンディン

牛はヒンドウ教では聖なる存在として崇められています。インド神話の中にも牛が登場しますが、特に有名なのが「聖牛ナンディン」です。すべての四脚動物の守護神と言われ、シヴァが踊る時にはその楽曲を奏でる役目をもっています。

乳海攪拌の時に生まれた牝牛スラビーと聖仙カシユヤバの子供で、シヴァ神の家族に数えられています。「牛が家族？」と思われるかも知れませんが、シヴァの家族構成は「父シヴァ・母パールヴァティー・長男ガネーシャ・次男スカンダ・聖牛ナンディン」となっているのです。神々の家族に含まれるということから、どれだけ「牛」が大事にされてきたかがわかります。

聖なる河ガンガー

インド神話の中には多くの河の女神が登場しますが、その中でも特別な存在だと考えられているのがガンジス河の女神ガンガーです。

祖先の魂を救いたいと願ったパギーラタの祈りに応えて、天界から飛び降りたガンガーをシヴァがその額で受け止めた、という神話から、シヴァの体を伝って地上に流れるガンジス河の水には「罪を洗い清める」力があると信じられています。そのためガンガーには「パギーラティー（パギーラタ王がもたらしたものの）」という別名もあります。